

立ちすくむ気持ちを振るい立たせながら2年半

「もう2年半」「まだ2年半」時の流れが同じでも、感じ方は異なります。2011年3月11日、日本中を震撼させたあの出来事から今日で2年と6ヶ月が過ぎ、被災者・避難者達はこの歳月をどう受け止めておられるのでしょうか。2020年の東京オリンピック開催決定に悲喜こもごもの心情を抱く被災地に、私たちはいかに寄り添い続けるのか、改めて問われています。

その答えを今夏、山本先生が意を決して出向いた被災地で得てござりました。

リレートーク

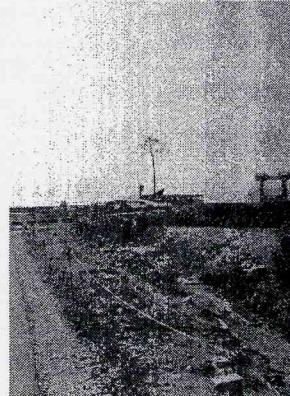
体育科 山本 嘉代

「被災地には1日でも早く行くべき」そう言われて私は、この夏休み、宮城の気仙沼、岩手の陸前高田を訪れました。

東日本大震災が起った2011年3月。その5ヶ月前に父を亡くしたばかりの私は、なかなか人の死を受け入れられず、被災地に行くのを躊躇していました。実際にこの夏、被災地を訪れ、今ではそのことを少し後悔しています。

津波の被害が大きかった沿岸部は未だにほぼ何もなく、倒壊した建物がポツポツと残っている状態でした。特に、奇跡の一本松で知られる岩手の陸前高田は、本当に何もありませんでした。瓦礫の撤去は既に終わっており、道路も通っているけれど、そこにあったはずの家、学校、駅、お店などは何ひとつなくなっていました。ただ、そこに以前何があったかを知らない私が、その光景が非日常であるということを理解するには、頭の中で想像するしかできませんでしたが・・・

だからこそ、「被災地には1日でも早く行くべき」だったのだと思いました。



そんな荒涼とした更地を歩きながら、それでもまだ残っている地震のあとを写真に残そうとカメラを向けるたびに、「これ撮っても良いんかなあ」とか「地震のほんまの恐ろしさを知らん私が大変だったとか、ほんますごい、ひどい」とか簡単に口にして良いのかなどとすごく考えました。

人は悲しみを人それぞれのタイミングで思い出すものだと思います。その思いを共有できるときもあれば、共有できないときもあります。この地震を体験した人、そうでない人とでは共有できることの量や重みが違いすぎると私は思います。でも、悲しみや、悲しみの中にも生まれる小さな喜びに一緒に寄り添うことはできるんじゃないかな、そんなふうに私はこの震災と向き合っていける人になろうと私は被災地を歩き思いました。

<裏面に続く>

2年と半年……復興は進んでいますか？？

気仙沼の「復興屋台村 気仙沼横丁」、「復興商店街 南町紫市場」。復興商店街や屋台村には津波で店を失った店主さんたちのお店がたくさん並んでいます。仮設店舗ですが、笑顔と活気があふれるお店ばかりです。でもきっと、笑顔ばかりの日々ではないはずです。この震災で大事な人、大切なものをたくさん失われた人も多いはずです。でも、立ち止まっているわけにも、悲しんでばかりいるわけにもいかない・・・そんな静かな力強さをこの街の人たちから感じました。そんな人の気持ちとは裏腹に、実際の復興の状況はというとほとんど進んでいないのが現実でした。復興の兆しを感じるよりは、復興にかかる資金の確保、人の確保、人が寝泊まりして作業するための施設の確保などがまだまだ整っていません。では、この問題に対して私ができることは何か？？残念ながら、そうたくさんできることはできません。でも、被災地の現実を知ること、毎日の生活の中で、東北の被災地に目を向けること・・・小さなことかもしれません、そこから始めるしかないと思います。今回、私は被災地の旅をしてみて、地震のことも被災地のこともまだまだぜんぜん分かっていないと少し恥ずかしくなりました。でも、それを生身の体験で分かったことに意味があると思って一人の社会人として、できることをしていこうと思いました。

解体が始まったが…

9日から「見ると辛い」という地元の

意向を受けて9月9日解体作業が始まった「第18共徳丸」を目の当たりにした感想

気仙沼に打ち上げられた大型漁船「第18共徳丸」。重さ330トンの共徳丸は震災の津波によって、港から750メートルも離れた街まで運ばれてきた。大きすぎて移動できなかった「共徳丸」は、流された場所にそのまま今も残っていた。共徳丸以外のがれきは既に撤去されているので、更地にポツンと共徳丸がある。この共徳丸を震災遺構として残すべきかどうか市役所と地域住民の間で賛否両論あったようだが、解体されることになった。「震災の記憶がよみがえる」として保存に反対する住民の声やその他にも、保存することのメリット、デメリットいろいろな考え方があったようだ。結果、解体されることになったが、共徳丸がなくなることによって震災の傷が癒えることはないだろう。むしろ、なくなったことによって何かを忘れていくてしまうことのほうが私は怖いと思う。だから、残すべきだとそんな単純なことではない。形がなくなつたからといって震災のことを忘れてはいけないのだ。悲しみや、痛みは風化してしまします。でも、亡くなった人や無くした物、そしてそこにあった思いは忘れてはいけないと私は思う。共徳丸の横に立派に咲き誇るひまわりが私の脳裏に深く焼き付いている。どんなに悲惨なことがあってもそこに凜と咲く花の姿を見て、改めて生きることの大切さ、尊さを思った。共徳丸はなくなる。そして、今、自分が住んでいるところにいると、被災地のあの何もなくなってしまった情景は忘れないでいる。でも、あのひまわりを見て思ったように、何かを見て被災地のことを思う機会を増やそうと思った。そうすることで、自分の生き方が少し変わるように思うから。

幸せ運ぶ四つ葉Tシャツのお札状が届いています

200枚のTシャツにメッセージを添えて、今まで繋がった被災地の方々へお届けできました。「私どもへの変わらぬ思いには本当に頭が下がります」「可愛い四つ葉のクローバーTシャツ娘二人が喜んで着させて頂いています。」「以前頂いたCDの歌声とTシャツの清々しいイメージが一緒です」「頂戴したメッセージと一緒に仮設の集会所に置きましたら、その場で早々に着て、みなさんに披露する子ども達の姿がありました」「一言素晴らしい学校ですね」など全文を紹介できませんので掲示板をご覧下さい！